今月のトピックス

特集 会社訪問 -No.20
石塚運送有限会社 様

「従業員はわが社の宝」
アットホームな会社づくりをモットーに歴史を紡ぐ

勝浦漁港は、国内有数の近海カツオ一本釣り漁業の水揚げ港として広く知られている。また、勝浦漁港の水揚げ量は銚子漁港に次いで県内第２位となっており、首都圏に対する水産物の一大供給拠点として重要な位置を占めている。

勝浦漁港で水揚げされた鮮魚の輸送などを手がけてきた石塚運送㈲（石塚誠一代表取締役）は、当地で 67 年の歴史を積み重ねてきた。物流を取り巻く環境の変化がますます加速する中にあっても、当社ではさらなる輸送品質向上への取り組みを着実に続けている。

石塚社長と、ピカピカな白いボディに大きく記された社名が目を引く同社のトラック

■鮮魚の品質維持に様々な工夫を凝らす「働きやすい会社」への取り組みも加速

石塚運送㈲は昭和 38 年８月、先代社長の石塚肇氏によって設立された。もともと肇氏は同社設立前から水産会社に勤務し鮮魚輸送に携わっていたこともあり、独立して立ち上げた同社でも勝浦漁港で水揚げされた鮮魚の輸送を事業の中心に位置づけた。

同社が鮮魚輸送を行う上で最も大事にしていることは、「魚の品質をいかに保ちながら輸送するか」ということである。魚を市場から出荷する際に、直射日光や外気温によって魚体の温度を上昇させてしまうと、魚は徐々に腐敗してしまう。品質維持の重要なカギとなるのが、「魚の温度上昇を抑えること」である。

勝浦漁港では、水揚げされた鮮魚を発泡スチロール製の箱に入れ、そこにまんべんなく氷を詰めてふたをした上で、パレット積みする。トラックへの積み込みの際にはカウンターフォークリフトを使用するため、低温の状態で素早い積み込み・積み下ろしが可能となっている。

また、輸送の間の温度管理も欠かせない。同社では会社設立後数年間、冷却機能が付かない保冷車による輸送を行っていた。しかし、保冷車では積載した鮮魚を長時間低温な状態に保ち続けることができない。そこで同社では昭和 45 年頃に、周辺地域の運送会社では初めて冷蔵・冷凍車を導入。低温状態をキープすることができるようになったことで、魚の輸送品質を大幅に向上させることができた。

鮮魚は最終的に消費者の口に入ることから、輸送に際しては衛生管理も重要になってくる。石塚社長は、同社の車両のボディの材質を、従来のアルミから FRP（繊維強化プラスチック）に変更。白いボディに変えたことで汚れが目立ちやすくなったことから、同社のドライバーはこれまで以上に念入りに洗車をするようになった。また、同社では大型トラック専用の自走式洗車機を２台導入。汚れに気付いた際に、迅速に洗車することが可能となった。

石塚　誠一　代表取締役

「自走式洗車機を導入したことで、車両を常に清潔に保つことができるようになり、水産業者の皆様からの当社への評価が高まりました。一方で、運送事業者にとっては『ドライバーの拘束時間削減』も大きな課題です。洗車機を導入したことで洗車に必要な時間が削減でき、その分ドライバーに早く帰宅してもらうようにしています」（石塚社長）

ドライバーの拘束時間削減の観点から、同社では高速道路の積極的な活用も進めている。東京都内の市場への輸送の際、かつては一般道経由で帰庫させるようにしていたという。しかし、平成９年に東京湾横断道路（東京湾アクアライン）が、続いて 25 年には首都圏中央連絡自動車道（圏央道）木更津東インターチェンジ（IC）－東金 IC 間が開通。これらの高速道路を積極的に活用することで、拘束時間削減を実現した。

さて、同社のドライバーは勤続年数の長いベテランドライバーが多く、定着率も良い。同社では、ドライバーの満足度アップに向け

鮮魚輸送では温度管理が最重要。魚が入った発泡スチロールの箱に氷を詰め、低温を維持する

近年は、勝浦漁港で揚がった鮮魚以外にも冷凍加工品やロックアイスの輸送も手がけている

自走式洗車機を２台導入。洗車時間が短く済むためドライバーの拘束時間削減にも繋がった

た取り組みも進めている。

主要な輸送先である豊洲市場は、日曜日と水曜日が休業日と定められている。それに合わせて、同社の鮮魚輸送担当のドライバーは、市場の休業日の前日となる土曜日と火曜日を休日とした。また、冷凍加工品輸送担当のドライバーについても休日を日曜日に固定（その他に週１回休日がある）したことで、休日の予定を立てやすくしている。

また、賃金体系にも工夫を凝らしている。同社ではドライバーに対して、毎月決まった賃金にプラスして、乗務の途中で食事をとる際などに充ててもらうために、１日あたり中型車の場合は２千円、大型車の場合は３千円を現金で支給している。

ところで、同社の２代目社長である石塚社長は、昭和 50 年、20 歳の時に同社に入社した。入社後、７年ほどドライバーとして経験を積み重ね、その後３年間運行管理の仕事に就いていた。石塚社長が 30 歳になったとき、先代社長の肇氏が 56 歳で急逝。急遽社長の座を引き継いだ石塚社長は、同社の経営を守り抜いていくべく、日々無我夢中で社業に取り組んだという。

「父の急逝を受け社長に就任した時、私はまだ 30 歳と若く、周りのドライバーはみんな私よりも年上でした。しかし、周りのドライバーたちはこれまで一生懸命働いてきた私の姿を見てきたこともあり、私のことを認めてくれて、一丸となって苦境に立ち向かうことができました。経営者一人だけでは、会社という組織を守っていくことはできません。私は、『従業員はわが社の宝だ』と捉え、私を支えてくれたドライバーたちと一緒に、喜びや苦しみを共有しながら必死に汗を流してきました。現在でもその思いを忘れることなく、アットホームな会社づくりをモットーに、当社を従業員にとって働きやすい会社にしていきたいと考えています」（同）

同社は現在、本社（勝浦市）と営業所（船橋市）の２拠点体制をとっている。本社に 20 人、営業所には 13 人のドライバーがいるが、全てのドライバーが一堂に会する機会はほとんどない。そこで、同社では福利厚生施策の一環として、市場が休みになる正月に全社員が参加しての新年会を勝浦市内のホテルで開催し、仲間意識の醸成に繋げている。

現在 65 歳となった石塚社長は、千葉県トラック協会長夷支部長としても貢献を続けている。近年は、もっと協会活動に参加してもらうように、支部内の若い経営者たちに対して積極的に働きかけを行っているという。

「時代の流れとともに、物流を取り巻く環境は大きく変化しています。当社でも、勝浦漁港での水揚げ高の伸び悩みを受け、鮮魚から冷凍加工品などへと輸送の幅を広げてきました。私には 34 歳になる息子（大祐氏）がおり、現在営業所で働いていますが、将来的には当社を力強くけん引し、変化するお客様のニーズにより的確に対応できる会社にしていってもらいたいと願っているところです」（同）

ホットにゅーす

不惑を過ぎて旅行の魅力にはまる もう一度訪れたい「アメリカ」

石塚社長は 40 歳を迎え、家族とともに旅行に行くことが増えたという。旅行歴の長い石塚社長に、「数多くの旅行先の中で、もう一度行ってみたい場所」を伺うと、「機会があれば、スケールの大きさが非常に魅力的なアメリカに」と答えた。

また近頃は、休日になると孫を連れて、近くの海辺まで散歩に行くのが習慣になっている。

順子夫人とともに訪れたグランド・キャニオン（米国アリゾナ州）。夫妻にとって思い出の地となった

企業プロフィール

石塚運送有限会社

代表取締役　石塚　誠一
千葉県勝浦市浜勝浦 80
従業員　45 人（ドライバー 35 人）
台数　35 台